

雪〇〇て・・・

雪解けて 村いっぱいの 子どもかな

この句は、雪解けの季節を迎え、待ちかねていた子どもたちが一斉に外へ飛び出し、村中が子どもたちでいっぱいになっている様子を生き生きと描写した俳句ですね。もちろん作者は、小林一茶。彼は、江戸時代後期の俳人、庶民的な生活や自然を題材にした俳句を多く残しました。この句は、厳しい冬が終わり、春の訪れを喜ぶ子どもたちの姿を通して、生命の息吹を感じさせる作品だと思います。

さて、今週は寒波の影響で毎日雪が降っています。今朝（2月6日）は、昨夜から降ったと思われる雪がうっすらと積もり、広島県の沿岸部にまで交通機関に影響を与えています。

横浜小学校の子どもたちはというと、いつもより笑顔が多く、小走りにやってくる姿が目立ちました。手には、小さな雪玉やミニ雪だるまを持っている子もいれば、自分の帽子にたくさん雪を詰め込んで大事そうに運んでくる子もいます。正門まで来ると、私との挨拶もそこそこに、真っ白に染まったグラウンドを見て、「すごい！」「やばい！」と歓声を上げながら駆け出していきました。

普段はなかなか積もることのない雪に、子どもたちは大興奮。足元を気にするどころか、雪を踏みしめる感触を楽しむように、元気いっぱいに走り回っています。友達と雪を投げ合ったり、小さな雪だるまを作ったりする姿は、まさに一茶の俳句にある「村いっぱいの子ども」の光景そのものです。寒さをものともせず、冬ならではの自然の恵みを存分に味わう子どもたちの姿に、私も思わず笑顔になりました。



降雪が珍しいこの地域では、『雪降って 笑顔いっぱいの 子どもかな』または、『雪降って グラウンドいっぱいの 子どもかな』がふさわしいのではないのでしょうか。

坂町立横浜小学校
校長 小川 博正